

はしがき

天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見¹

みなさんにはこれは何に見えるだろうか。無意味な漢字の羅列や暗号、何か難しそうなもの、あるいは単に興味をそそられないものだろうか。雄大な天空に思いをはせて詠まれた句とはとても思えなかつたかもしれない。これがデジタル化され0と1で表されれば、ますます無味乾燥な情報に見える。しかしそこには、確かに人の想いが込められて載っている。

ICTやデータサイエンスと言うと、データや計算、結果や利益だけが追求されがちである。それこそ人の気分や感情までも数値化、点数化して効率的に利用しようとする。このテキストも一見、そのように見えるかもしれない。しかしそうであるならば、遠く青白い空間を見つめて、静かに物思いにふける鳥（百舌^{もず}）が、カバー（表紙）にはなっていないだろう。

パソコンの操作ではなく、ミッションの遂行を主軸（左ページ）にしているのも、みなさん自身が、心ある人として、想いを抱きつつ、考えながら進め、道具を道具として使いこなし（右ページ）、目標を達成する力を付けてもらえるように、との希望が実は入り込んでいる。ストーリーの中で、あくまでも人としてロール（役割）を演じながら、学んでもらえればと思う（次ページ参照）。

この形式が成了のも、ずっとICTリテラシー関連の講義を共に担当させて頂いた、芦原典子先生、池田 武先生、河西 正之先生、安谷 元伸先生、山崎 校先生、山本 桂子先生、吉田秀和先生（五十音順）からのご指導・ご教示が有ってこそである。心からお礼申し上げる。また、離れてもなおご教示を頂いた篠原 正典先生にも感謝申し上げなければならない。

加えて、構想時たのしい会話の中でヒントを頂いた故・吉田 弘治さん、注文の多いイラストを描き、作業などしてくれた工藤 菜月さん、要望の厳しい中、多様なコラムを執筆して下さったみなさん、そしてずっと支えてくれた家族にも、感謝が尽きない。

さらに、異例の段取りで進められた、風変わりな企画を形にするため尽力して頂いた、法律文化社編集部の舟木 和久さんにも、改めてお礼申し上げる。

多くの想いを紡いだつもりの本書が、冷徹になりそうなこの世の中で、血の通った温かみのあるみなさんの飛躍・活躍の足がかりになれば、これほど嬉しいことは無い。

2025年10月

上出 浩

1 『万葉集』卷7-1068「詠天」、「右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出。」とされる。読み下し文「天の海に雲の波立ち月の船星の林に滲ぎ隠る見ゆ」。現代語訳「天の海には雲の波が立ち、月の船が星の林に滲ぎ隠れていくのが見える。」奈良県立 万葉文化館 Web ページ「万葉百科」による。

https://manyohyakka.pref.nara.jp/db/detailLink?cls=db_manyo&pkey=1068

(2025年5月26日訪問)。なお、2024年は柿本人麻呂没後1300年とされる。

